

# 少女マンガ雑誌における「外国」イメージ

—— 1960～1970年代の『週刊少女コミック』分析より ——

増田のぞみ・猪俣紀子\*

“Foreign Countries” Images in Shojo Manga Magazines:  
An Analysis of “*Weekly Shojo Comic*” in 1960～1970’s

MASUDA Nozomi and INOMATA Noriko

**Abstract** : This research studied *Weekly Shojo Comic* (including *Shojo Comic*) that was first published as its May, 1968 issue, and its page constitution and works set in foreign countries were investigated. It was clarified that compared to *Weekly Margaret* and *Weekly Shojo Friend*, there were many works set in the West but not in any specific country in *Weekly Shojo Comic*. It was also clarified that such works disappeared after 1975, and that instead, the number of works set in a clearly specified place such as New York or Paris increased. On the other hand, it is a characteristic of *Weekly Shojo Comic* that works with SF or fantasy elements set in a fictitious country appeared in the latter half of the 1970s. By comparing with other magazines, it was shown that it had diverse content and that this could serve as a background for creating works that go beyond the framework of shojo manga.

**Key Words** : shojo manga, “foreign countries” images, manga magazines

**概要** : 本稿では、1968年5月に創刊された小学館の少女マンガ雑誌『週刊少女コミック』（『少女コミック』を含む）を対象とし、雑誌のページ構成や「外国」が舞台となる作品について調査を行った。創刊時から1970年代半ばまでの作品では、『週刊マーガレット』および『週刊少女フレンド』と比較すると、西洋を舞台としながらもどこの国かが特定されない作品が多く描かれていることが明らかになった。またそうした作品が1975年からは掲載されなくなり、ニューヨークやパリといった地名が明記される作品が増加した。一方で、1970年代後半にはSFやファンタジーの要素を含んだ架空の国を舞台とした作品が登場する点も『週刊少女コミック』の特徴である。他誌との比較からは、後発の雑誌であるからこそ多様性に富み、少女マンガというジャンルの枠を越える作品を生み出す土壌となりえた背景が示された。

**キーワード** : 少女マンガ、「外国」イメージ、マンガ雑誌

---

\* 茨城大学人文社会科学部・准教授

## はじめに

本稿では、戦後の少女マンガ雑誌が何を描き、読者に何を提示してきたのかを問う作業の一環として、1960年代から1970年代にかけての『週刊少女コミック』（小学館）を対象とし、ページ構成の変化やマンガ作品のなかで舞台となる国についての調査を行った。2015年度の『週刊マーガレット』（増田・猪俣2016）、2016年度の『週刊少女フレンド』（増田・猪俣2017）の調査に次いで、今回は『週刊少女コミック』を取り上げ、この3誌を比較しながら、1960年代から1970年代にかけて少女マンガ雑誌において何が描かれ、舞台となる「外国」のイメージがどのように変化してきたのかを考察する。

『週刊少女コミック』は当初は週刊ではなく、『少女コミック』という雑誌名で1968年5月号から創刊されている。1969年8月号までは月刊、1969年8月22日号からは月2回の刊行となり、1970年3月27日号まで月2回の刊行が続いた。その後、1970年4月19日号が週刊誌としての『週刊少女コミック』の創刊となる。今回は、この『少女コミック』として登場した月刊誌および月2回刊行時代を含めて、『週刊少女コミック』と表記し、その歴史を辿ることとする。

今回の調査では、先行する『週刊マーガレット』（増田・猪俣2016）および『週刊少女フレンド』（増田・猪俣2017）の調査に倣い、各年の1月、4月、7月、10月の最初の号を対象とした。ただし、『少女コミック』として創刊された1968年については、創刊号となる5月と、7月、10月、12月の4冊を取り上げている。1968年の5月号、7月号、10月号、12月号および1969年の1月号、4月号、7月号、10月号と、1971年、1973年、1975年、1977年の1月、4月、7月、10月の各月の始めの1冊ということで、合計24冊を主な対象とし、適宜その他の号も参照した<sup>1</sup>。1968年と1969年はすべて月刊、1971年からは週刊として発行された号を対象としている。

## 1、ページ構成の変化

まず、1968年5月号および1969年から1977年までの各1月号について、ページ構成の変化を示したのが以下の表1および図1である。内容の分類は、①マンガ作品、②スター・アイドル情報、③おしゃれ・ファッション関係、④小説・実録、⑤読者・まんが家関連、⑥その他・読み物関連である。

表1 『週刊少女コミック』におけるページ数の変化

	マンガ作品	スター・アイドル情報	おしゃれ・ファッション関係	小説・実録	読者・まんが家関連	その他・読み物記事
1968年5月	290	19	2	13	5	6
1969年1月	309	18	3	11	5	1
1971年1月	227	4	3	0	3	5
1973年1月	243	23	0	0	9	13
1975年1月	226	4	0	0	8	2
1977年1月	275	0	0	0	10	2

<sup>1</sup> 調査にあたっては、甲南女子大学文学部メディア表現学科が所蔵する少女マンガ雑誌コレクション、大阪府立図書館国際児童文学館、国立国会図書館および増田・猪俣個人が所有する資料を利用した。所蔵のないものに関してはなるべく発刊日の近い号を閲覧した。マンガ作品としては、4ページ以上のストーリーマンガ作品すべてを対象としている（増田・猪俣2016、増田・猪俣2017）。

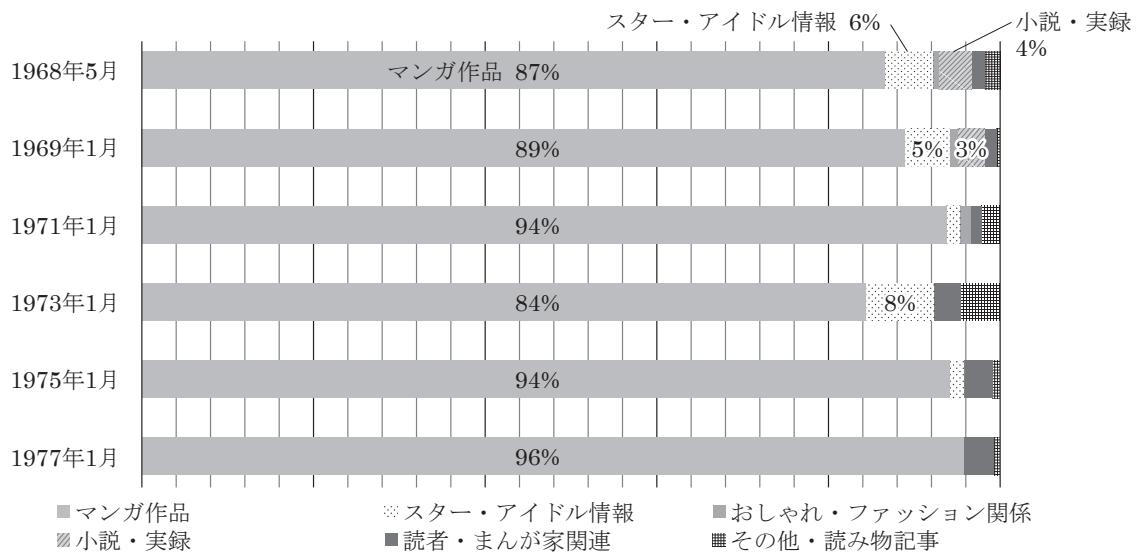


図1 『週刊少女コミック』におけるページ構成の変化

## ①マンガ作品

雑誌全体の総ページ数は、月刊誌として創刊した1968年5月号は裏表紙まで含めて342ページである。週刊誌になると1冊ごとのページ数は減り、1973年から1975年頃は270ページ前後で推移している。そのなかで、マンガのページ数は、1968年5月号は290ページ、1969年1月号は309ページであり、この時期は各号300ページ前後となっている。週刊誌となってからは1971年1月3日号が227ページと少し減っているが、月4冊ほど発行されるようになったことを考えると、月単位のマンガ作品のページ数は約900ページにもなる。月刊誌時代と比較すると約3倍に増えたといえる。1977年1月2日号は275ページで、さらにマンガ作品のページ数は増加している。『週刊少女コミック』に掲載されたマンガ作品およびマンガ家の特徴については、次章以降に詳述する。

## ②スター・アイドル情報

『週刊少女フレンド』と同じく『週刊少女コミック』においても、スターやアイドルは各号の表紙に登場し、カラーグラビアが掲載されるなど雑誌の顔として重要なコンテンツとなっている。創刊号となる1968年5月号の表紙にはザ・タイガースのメンバーが並んでおり、映画「世界はほくらを待っている」の撮影風景や5人のメンバーが久美かおるを取り囲む写真が掲載されたグラビアページのほか、「3,030人にあたる！大懸賞」として「ザ・タイガースのサインいりハンカチをあげます！」という企画が行われた。また、スターの近況や思い出のエピソードを紹介する「にんきスターのひみつ」という1/3ページのコーナーが16ページにわたって掲載され、吉永小百合や黛ジュン、西郷輝彦などが登場した。この記事は毎号掲載されており、1969年1月号では、このコーナーが「グループサウンズのひみつ」となり、グループサウンズの人気スターが11ページにわたって取り上げられている。ただし、これらは1/3ページでのとじ込みとなっているため、『週刊少女フレンド』と比較しても、突出して多くのページが割かれているわけではない。とはいえ、1973年でもスター関連記事は多く、増加傾向にあった。吉田拓郎などの歌の歌詞が全文掲載され、歌謡曲の人気も取り込もうとする様子が窺える。しかし1977年にはこうしたスターやアイドルの情報が全くなくなっていることから、『週刊少女フレンド』よりも早い段階で、これらの記事が姿を消しているといえる。1978年からは歌番組「ベストテン」も始まり、1970年代後半は少女マンガ誌とそのほかの娯楽要素が棲み分けを完了し、それぞれのメディアを持つようになった時期といえる。

## ③おしゃれ・ファッション関係

おしゃれ・ファッション関係の記事としては、1968年5月の創刊号にて谷ゆきこのカラーイラストによる「すみれちゃんきせかえスタイルブック」が厚紙でとじ込まれているほか、1971年1月3日号には着物のグラビアが掲載されるなどの例がある。『週刊少女コミック』におけるおしゃれ・ファッション関連の記事でとくに注目した

いのは、1969年1月などにみられる田村セツコによる「セツコのおしゃれ相談」というページで、田村のイラストが2ページから3ページにわたり、画面全体に自由なレイアウトで描かれたコーナーとなっている。田村が「おしゃれの先生」として登場し、読者からのおしゃれやファッションに関する質問に答える形式で、読者との交流の要素も含まれている。写真でファッションを提示するのではなく、可愛らしいイラストを用いて、読者と交流を図るといったマンガ誌的なファッション指南であった。1973年7月1日号ではスターに関する記事が15ページと増えており、スターのヘアの紹介など、スターからファッションの情報を得ている様子がわかる。

おしゃれ・ファッション関連の記事のページ数は他の記事と比較すると多くはないが、マンガ作品のなかにファッションモデルやファッションデザイナーが登場するなど、ファッションに関連した作品は散見される。1975年4月6日号に掲載された「この娘うります！」(萩尾望都)は「ファッション・ラブコメディ」と書かれており、パリを舞台にファッションショーが行われ、『カメラ・パリ』という雑誌も登場している。

1975年に『JOTOMO』という表記にリニューアルされた『女学生の友』(小学館)の広告が1975年1月1日号に掲載されているが、「ティーンのためのファッションブルマガジン!」「おしゃれで楽しい雑誌よ!」と書かれており、ファッションブックが付録となり、郷ひろみや山口百恵などのスターが表紙を飾っている。ファッションやおしゃれ、スターの情報は『JOTOMO』に掲載されるようになる一方で、『JOTOMO』には竹宮などの人気作家がマンガを掲載しており、『週刊少女コミック』と読者が重なっていた可能性が高い。

#### ④小説・実録

1968年5月の創刊号には「実録・小説」ジャンルとなる「ほんとうにあったこわいはなし」が3分の2ページの大きさで13ページ掲載されていたが、その後なくなっていく。『週刊少女フレンド』と比較すると、実録・小説がほとんど掲載されていないことがわかる。

一方、怖いマンガは少女マンガでは人気のジャンルで、例えば楳図かずおは『週刊少女フレンド』に連載を行い、人気を博していた。『週刊少女コミック』でも創刊号から、古賀新一の「怖いマンガ」が掲載されている。しかし1971年以降になると、「かわいそうなマンガ」は残るものの、「怖いマンガ」、「怖い話」とともに姿を消していく。後発の『週刊少女コミック』は、1968年の時点で人気のジャンルであった「怖いマンガ」を他誌より強化する意味で、マンガと読み物の両ジャンルにおいて扱っていたと考えられる。

#### ⑤読者・まんが家関連

読者関連の記事は、1968年5月の創刊号から「ジュニアメイト」というコーナーとしてすでに登場している。1968年、1969年、1971年にも続くこの記事では、読者から編集部へのお便りの紹介、読者同士の「おたよりこうかん」、読者によるイラスト投稿などが含まれたコーナーが継続的に設けられている。1975年、1977年にも「おたよりサロン」という同様のコーナーが毎号掲載されている。

1973年7月1日号において、読者コーナーにウィーン・モーツァルト少年合唱団来日、ミッシェル・ポルナレフ来日の情報が掲載されている点も注目される。竹宮恵子は少女マンガで少年愛を描き始めた背景には、もともとウィーン少年合唱団が好きだったことも影響しているという<sup>2</sup>。この時期の西欧の少年合唱団の流行は、1960年代後半の『週刊少女フレンド』でもみられたことから、少女マンガ誌で人気のコンテンツだったことがわかる<sup>3</sup>。

また、『週刊少女コミック』の特徴は、マンガ家関連の記事が多く、マンガ家の近況が頻繁に読者に伝えられていることだろう。一人のマンガ家が1ページを使ってイラストとともに近況を伝える「まんが家だより」のコーナーは、ファンにとってはマンガ家のことを知るための貴重な情報源となっている。1975年、1977年には「まんが家ホットジョッキー」などが掲載され、マンガ家が連載中の作品や表紙のイラストについてコメントしたり、近況を紹介したりと、作者と読者をつなぐ重要なコンテンツとなっている。

読者・まんが家関連の記事でとくに注目したいのが、1975年4月6日号に掲載された「まんが家と電話でデー

<sup>2</sup> 竹宮恵子、『少年の名はジルベール』、小学館、2016年、p.40

<sup>3</sup> 増田・猪俣、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ——1960～1970年代の『週刊少女フレンド』分析より」、2017年。

ト」という企画だ。この企画は「春休み話題の2大企画」<sup>4</sup>の「その2」となっており、読者が決められた番号に電話をかければ、マンガ家と話せるというものだ。期間は1975年2月28日から4月17日の春休み期間で、ひとり1週間ずつ、合計7人の作家が登場する。「にんきまんが家のお話が、90秒間聞けるのです」と書かれており、通常は録音された音声の流れ、読者はそれを聞くことができる。ただし、毎週木曜日の午後6時から午後7時までの1時間は「先生が直接応対してくれる」とのことで、作者と読者が直接電話で会話をする機会を編集部が設けているのである。

登場するマンガ家は、第1週から順に、大島弓子、萩尾望都、すなこ育子、高橋亮子、上原さきこ、竹宮恵子、牧野和子と、読者に人気の作家がずらりと並ぶ。1975年4月6日号には、表紙に「日本ではじめてまんが家と電話でデート」、「今週はすなこ育子先生です」とイラストとともに紹介がある。このような作者と読者との直接的な交流は、『週刊少女コミック』の読者と作者との距離の近さを示していると考えられる。また、スター記事の多かった1973年にもスターと電話で話す企画が行われていた。1975年のこの企画は、若い少女マンガ家たちが、少女読者にとってお姉さんのような存在であるとともに、スターのような華やかな存在だったことを示している。

#### ⑥その他・読み物関連

その他の読み物関連の記事として注目したいのは、1970年以降、異性との交際、性への疑問に答える記事が散見される点である。1971年6月20日号では、「コンピュータが選ぶあなたのボーイフレンド」(4ページ)の企画があり、10月17日号でもグラビアに「BFにラブアタック」(1ページ)が掲載される。「ラブアタック」は、野球やバスケットボールなどをする男性のイラストがあり、自分のボーイフレンドの得意なスポーツに即して、ボールの部分塗りつぶすと、自分がどのようなことに気をつけて彼に接すればよいかの注意書きが示されるという企画だ。また、1973年4月15日号では「♥あしたのための愛の講座 だって女の子だもん…!?!」において、ジュニア小説を書いていた藤木靖子が、男の子が意地悪をしてくるのは関心があるから、と男の子の行動を解説している。10月14日号では、「アドバイス 新・あなたはおとな!?特集」「あなたの愛と性」をテーマに、校医、中学教師、作家がそれぞれ、からだ、学校生活、心の悩みに応えている。胸の膨らみの大小、姉の恋人を好きになった悩みなどへ、専門家が応え、教え導くかたちを取る。大人の女性へと変化する、少女の身体と気持ちを真正面から受け止めているところが1960年代と異なるところといえる。

1975年になると、「性の悩み NOWNOW (ナウナウ)」と題された読者から寄せられた悩みの投稿に専門家やタレントらが応えるというコーナーがみられる。毎月第一週に掲載ということで、扉には投稿された読者の写真が掲載され、写真の投稿を呼びかけるメッセージが添えられている<sup>5</sup>。1975年1月1日号では、読者の写真として小6の少女が登場している。読者から寄せられているのは、「生理用品をカバンからとりだしにくい…」という悩み、「愛へのあこがれ キスにたいする好奇心はつるばかりなの…」といった相談であり、それらに専門家らが丁寧に応えている。

1977年1月2日号では「ナウナウあなたの悩みQ & A」とタイトルが変わっているが、1977年にも同様のコーナーは続いている。「このページはあなたが作るページです。心やからだの悩みなど心配ごとのある人は、どしどしお手紙をくださいね」とメッセージが添えられている。この号では「生理不順が急に激しくなって…」「急に“死”がこわくなって…」「学校へ行きたくないんですが…」といった悩みの投稿がみられた。こうしたページは、学校では教えてくれない、親にも友達にも相談しにくい悩みを雑誌が受け止めてくれ、また他の読者も同様の悩みに対するアドバイスを共有できるという点で、読者にとって貴重なページとなっていたと考えられる。雑誌と読者、作者と読者をつなぐ複数の取り組みが、『週刊少女コミック』の熱心な読者を育てていたのである。

<sup>4</sup> 2大企画の「その1」は、CBS ソニーでレコード化が決定した大島弓子による「いちご物語」の主題歌の歌詞を募集するもので、告知ページには、特選の5万円の賞金をはじめ、多くの賞金や賞品の情報が並んでいる。

<sup>5</sup> 顔写真の投稿は独立したもので、悩みの投稿とは別となっている。

## 2、描かれる「外国」の違い

## 2-1、作品の舞台となった国

先に述べたように、今回の調査では1968年の5月号、7月号、10月号、12月号および1969年の1月号、4月号、7月号、10月号と、1971年、1973年、1975年、1977年の1月、4月、7月、10月の各月の始めの1冊ということで、合計24冊を対象としている。それらに掲載されたマンガ作品の舞台となった国を各号ごとにまとめたのが、以下の表2『『週刊少女コミック』掲載マンガ作品の舞台となった国』である。

表2 『週刊少女コミック』掲載マンガ作品の舞台となった国

	日本	フランス	アメリカ	イギリス	スペイン	イタリア	アフリカ	エジプト	ポーランド	ロシア	カナダ	西洋だが 国不明	どこの 国か不明	その他	連載作品数
1968年5月	5											1			6
7月	6											4			10
10月	8		1									1			10
12月	7											4			11
1969年1月	8									1		2			11
4月	7		1			1					1	2			12
7月	7		2									2			11
10月	7		1		1							1			10
1971年1月	10	1	1									1			13
4月	8	1	1									1			11
7月	10											1			11
10月	7	1										2			10
1973年1月	5	1	1									3			10
4月	4	1	1	1								3			10
7月	3									1		4			8
10月	6	1										2			9
1975年1月	7		3					1							11
4月	9	2						1							12
7月	8	1	1				1	1							12
10月	8						2		1					1	12
1977年1月	8	1	1	1										1	12
4月	9	1	1										1	1	13
7月	10	1	1											1	13
10月	11	1	2												14
合計	178	13	18	2	1	1	3	3	1	2	1	34	1	4	262

今回の調査にて対象とした『週刊少女コミック』24冊においては、4ページ以上のマンガ作品の本数は合計262作品となった。そのなかで、「日本」を舞台とした作品は178作品で、全体の68%を占めた。次いで、「西洋だが国不明」が34作品で13%、「アメリカ」が18作品で7%、「フランス」が13作品で5%、「アフリカ」「エジプト」がそれぞれ3作品、「イギリス」「ロシア」が2作品、「スペイン」「イタリア」「ポーランド」「カナダ」がそれぞれ1作品となった。

「日本」以外の場所を舞台とした作品は84作品で全体の32%であり、「どこの国か不明」および「その他」を除いた「外国」を舞台とした作品は79作品で30%となる。この時期の『週刊少女コミック』においては、約3割の作品が「外国」を舞台に描かれていたといえる。

「外国」を舞台とした作品のなかでは、「アメリカ」「フランス」「イギリス」「スペイン」「イタリア」「ポーランド」「ロシア」「カナダ」「西洋だが国不明」という「西洋」を描いた作品が73作品となる。「外国」を舞台とした79作品のうち92%が「西洋」の国を描いていることとなり、この時期の作品における「外国」は、やはり「西洋」に偏っていたことがわかった。

## 2-2、『週刊マーガレット』『週刊少女フレンド』との比較

ここからは、『週刊マーガレット』の調査(表3)および『週刊少女フレンド』の調査(表4)と比較しながら、『週刊少女コミック』の特徴を考えていく。

表3 『週刊マーガレット』掲載マンガ作品の舞台となった国

	日本	フランス	アメリカ	イギリス	インド	スペイン	オーストリア	ドイツ	イタリア	アフリカ	レバノン	西洋だが国不明	どこの国か不明	連載作品数
1967年1月	5	1										1		7
*4月	7											1		8
7月	7		1	1								1		10
10月	7	1	1									1		10
1969年1月	8											2		10
4月	4			1								5		10
7月	6			1								3		10
10月	6		1	1								1		9
1971年1月	7		2									1		10
4月	10		1											11
7月	7	1	1	1										10
10月	9		1											10
1973年1月	3	2	2		1							2		10
4月	6	2	1									1		10
7月	7	2	2									1		12
10月	9	2	1											12
1975年1月	9	1				1		1						12
4月	10	1	1					1						13
7月	7	1	1	2				1						12
10月	9	1	1	1										11
計	143	15	16	8	1	1		3				20		207

表4 『週刊少女フレンド』掲載マンガ作品の舞台となった国

	日本	フランス	アメリカ	イギリス	インド	スペイン	オーストリア	ドイツ	イタリア	アフリカ	レバノン	西洋だが国不明	どこの国か不明	連載作品数
1967年1月	7											3		10
4月	11													11
7月	6		1										1	8
10月	3	1	2	1						1				8
1969年1月	6	1	1									2		10
4月	9		1											10
*7月	6		3									1		10
*10月	7		2											9
1971年1月	6	1	1											8
*4月	7	1	3											11
7月	8	1											1	10
10月	10	1										1	1	13
1973年1月	5	1	1	2					1					10
4月	8			1										9
7月	5	1	1								1			8
10月	7											2		9
1975年1月	5		2											7
4月	7	1	1											9
7月	4	1	2											7
10月	8													8
1977年1月	9											2		11
4月	8	1										1		10
7月	7											3		10
10月	9			1								1		11
計	168	11	21	5					1	1	1	16	3	227

まず共通点としてあげられるのは、「日本」を舞台にした作品が約7割を占め、「外国」を舞台に描かれた作品が約3割となっている点である。『週刊マーガレット』においては、「日本」を舞台にした作品が68%で、「外国」を舞台にした作品が32%であった。『週刊少女フレンド』は「日本」を舞台とした作品が74%で、「外国」を舞台にした作品が26%となり、他の2誌と比較すると若干「日本」を舞台とした作品の割合が多くなっているが、3誌ともに約7割が「日本」、約3割が「外国」を舞台にしているといえる。

また、「外国」を舞台とした作品のなかで、描かれている国が明確な作品としては「アメリカ」を舞台にした作品が最も多く、次いで「フランス」となっており、この2国が最も多いという点も3誌ともに共通している。『週刊マーガレット』は「アメリカ」が16作品で「フランス」が15作品とほぼ同数であるのに対して、『週刊少女フレンド』は「アメリカ」が21作品で「フランス」が11作品と「アメリカ」舞台の作品がより多くなっている。2つの国が描かれる割合には差があるが、この2国で「外国」舞台の作品の多くを占めるという点は3誌ともに共通している。

一方、相違点に目を向けると、『週刊少女コミック』の特徴は何より「西洋だが国不明」となる作品が多いことである。「西洋だが国不明」とは、登場人物の名前や設定などから明らかに「西洋」であることはわかるが、どこの国かが特定できない作品を指している。『週刊少女コミック』では創刊号から1973年の終わりまでに合計33作品が描かれ、「外国」を舞台にした作品としては「アメリカ」や「フランス」を大きく上回り、最も多い結果となった。

この理由としては、『週刊少女コミック』が月刊誌としてスタートしており、当初は全ての作品が読み切りとなっていたことがあげられる。比較的短いページ数で描かれる読み切り作品では、舞台となる場所を詳しく説明する

必要がない場合が多い。一例としては、1969年1月号に掲載された2作品があげられる。「おおシェリー」(田中美智子)は、おてんばなシェリーが主人公となる「ロマンス・コメディ」と書かれており、シェリーはジェフのことが好きだが、ジェフはシェリーの姉であるリズのことが好きという三角関係が描かれる。「オリオン座でやっける西部げき」を見に行くというデートの約束や、「グループサウンズコンテスト」(バンドの演奏)と一緒に見に行くという日本の学生のデートのような場面が登場するが、どこの国を舞台にしているのかは明示されない。こうした家と学校と街が舞台となる恋愛物語が読み切りで描かれる場合、誤解やすれ違いを経て和解に至るといふストーリーが定番となっており、その舞台がアメリカなのか、フランスなのかを特定する必要がないものと考えられる。

もう一つのパターンは、同じく1969年1月号に掲載された「白雪は消えて」(和泉洋子)にみられる。この作品は、冒頭に「北国のこおりついた森の奥深くに氷の城がありました」と書かれた「ロマンチックなおとぎの国の物語」となっている。こうしたおとぎ話のような物語設定も、どこの国かを特定できない、あるいはする必要のない「西洋」が舞台になった作品として散見されるパターンである。

今回の調査では、『週刊少女コミック』においては、こうした「西洋だが国不明」作品が1973年までは毎号描かれているが、1975年以降にはみられなくなるということがわかった。1975年1月1日号の読み切り作品「マグノリアの朝」(小室しげ子)は、農場の息子トーマスと孤児として拾われたジュリアが主人公となる物語だが、冒頭に「アメリカ合衆国アーカンソー州マグノリア」と作品の舞台が明記されている。同じく1975年1月1日号の「北斗という名のひと」(西谷祥子)においても、「ネバダ州の山奥からパパを捜しにやってきた少女・北斗」という説明が書かれる。やはりこの時期に、「外国」はおとぎ話と同じような想像上の場所ではなく、具体的な地名をとともう現実空間に存在する場所として捉え直されたのではないかと考えられる。また、国がはっきりと描かれるようになる過程と捉えられるのが、1973年頃の動きである。同年1月号から連載が始まった、「プリティー・ロック」(牧野和子)は、アメリカが舞台で、主人公の名前はプリティー、友人はピーターなど、英語名が使われている。しかし主人公がファッションデザイナーを目指すストーリーのため、通う学校はフランスの女性名を使った「フランソワーズ学院」といい、デザイナーのフランソワーズが経営する。また、プリティーはフランス語を勉強している。同年4月号の「マドモアゼル通り」(大谷てるみ)は、舞台は日本だが、デザイナーを目指す主人公裕子が「一流のデザイナーになってパリへ行く」ことを目指す様子が描かれる。それぞれの国のイメージが具体的になり、「ファッション」といえば「フランス」というイメージが確立し、少女マンガに定着した結果であろう。

さらに相違点として指摘できるのは、『週刊少女コミック』では1970年代後半からSF的な設定を含んだ「その他」となる作品が登場したことである。1977年4月3日号に掲載されている「ダリウスの風」(作画グループ)は、物語の舞台が地球から30光年離れた「植民星ダリウス」となる。作画グループは、ばばよしあきを代表とする同人グループであり、複数の同人作家が作業を分担してひとつの作品を合作する制作スタイルを採用している。「ダリウスの風」においては聖悠紀が原作・演出やヒロインとなる麻紀の作画を務めた。このような少年誌でも活躍する同人作家によるSF要素を含んだ作品を掲載することは、少女マンガ誌としては挑戦的な試みであり、『週刊マーガレット』や『週刊少女フレンド』にはみられない大きな魅力となっている。萩尾望都によると、1970年代当時、少女マンガ誌の編集者は男性で、彼らは売れたものの前例に囚われ、新しいもの、つまりファンタジーやボーイズラブ系を描かせなかったという。そしてそれを不満に思った作家たちの流れが同人誌の世界で大きく育っていく原因だったとする<sup>6</sup>。そのなかで、『週刊少女コミック』は他の2誌と比較すると後発の雑誌であったからこそ、従来の少女マンガの枠組みに捉われない自由な編集方針が容認される環境があったものと考えられる。

### 2-3、萩尾望都と竹宮恵子にみる「外国」描写の特徴

『週刊少女コミック』において「西洋だが国不明」となる作品が多くみられた理由のひとつとして、今回の調査では「ドイツ語圏」「英語圏」と思われる作品も以前の2誌の調査に合わせて、「西洋だが国不明」作品として扱っていることがあげられる。例えば、萩尾望都の1973年10月号に掲載された「秋の旅」では、登場人物の名前が

<sup>6</sup> 萩尾望都『私の少女まんが講義』新潮社、2018年、p.104



ヨハンとルイーゼであり、ドイツ語圏と思われる名前がつけられている。他作品では、どこの国かわからない設定ながら、英語名が使われている作品が多いなかで明らかに異色である。これは、竹宮恵子が指摘するように、当時「なんとなくではあるが、萩尾さんはイギリス・ドイツ、私はフランス・イタリアというような得意な国の棲み分け<sup>7</sup>」がなされていた結果であろう。萩尾や竹宮の作品では、短編読み切り作品であっても、物語の背後に確かな舞台設定を感じさせる描き方が印象的である。

また竹宮は1969年から『週刊セブンティーン』で連載を開始した水野英子による「ファイヤー!」を読み、事実裏打ちされた厚みのあるアメリカが描かれていることに大いに刺激を受けたという。竹宮は1970年代初頭からすでに「風と木の詩」の制作を意識しており、「作品の多くの舞台設定をフランスにし始めていた」と語っている<sup>8</sup>。なぜフランスにしたかについては、「ただし、国はイギリスではなく、フランスにしました。イギリスのパブリックスクールはシステムそのものが決まっています、歴史がありすぎるので、フランスを選びました。それに私自身がフランスという国が好きだったのもありますし。イギリスの気質がそれほどなじめなかったというか、フランスのほうがもっと奔放なところがあるので、自分の性質にあっているほうを選びました<sup>9</sup>」と述べており、イギリス、フランスの歴史や気質を知った上での選択だったことが分かる。萩尾、竹宮が物語の舞台となる国の描き方に意識的であったことは明らかである。また竹宮は、1970年代の少女マンガがヨーロッパ志向であることに關して、大泉サロンの仲間たちと「外国を描くとしても、アメリカは広すぎて、よくわからないんだよね」と会話をしていたことを記している。当時の漠然と描かれる「西洋」、どこの国かわからないが通貨は「ドル」であるような曖昧な英語圏の描写は、こうしたわからなさを反映していたといえるのかもしれない。そのような状況のなか、明確なビジョンを持って舞台となる国の文化やイメージを描き出そうとする萩尾や竹宮は、やはり革新的であり、読者にとっても新たな世界を見せてくれる作家の登場を感じさせたに違いない。

#### 2-4、「外国」を舞台とすること

また、「外国」を舞台とすることで可能となる描写も存在する。1971年の「ピアのラブゲバ」(いしだひさよ)、「生まれちゃったの!」(牧野和子)の2作品では、前者が大学生カップルに三つ子が生まれるドタバタコメディ、後者は16歳のレナードと14歳のミリーのふたりに双子が生まれ、子供を預ける話題や家事について描かれる。海外が舞台だからこそ、主人公が若年の経産婦という設定も可能なのであろう。日本が舞台となる作品では、読者層より上の社会人女性が主人公の作品も多く、1971年6月号では、学生が主人公の作品は1つのみで、OL、マンガ家、デパート勤務などはたらく若い女性が描かれている。現実の社会状況に即した作品もあり、1968年の「青空にはばたけ」(松尾美保子)では工業都市の空気が汚染されている公害の悲劇が描かれている。

そのほか、日本が舞台の作品でも「西洋」が描かれる作品もあった。1968年の「しあわせすぎちゃん」(今村洋子)では、すぎちゃんのペンフレンドのピーターというアメリカ人が登場する。1968年の「エリの窓」(水野英子)では、洋館に憧れるエリが、自分の部屋を西洋風にするよう両親に頼む。念願の観音開きの西洋風出窓のある自室で、中世ヨーロッパを夢想し、そこで出会った王子様にそっくりな白人青年と恋に落ちるのであった。1971年の「愛の泉」(細川知栄子)では、ヒロインと恋仲になるジュリオはオーストリアという架空と思われる国の皇太子となっている。少女たちが西洋に憧れ、西洋の青年との恋愛を夢みる様子が描かれる。また、職業を持つ大人の女性を主人公にした、71年の「愛の旋律」(すなこ育子)では、失明した主人公が調律師となるために音楽青年とドイツに渡る。「ドケチ繁盛記」(河合秀和)では、主人公が破産した自分の家ののれんを再建しようと、結婚も捨てて女一人でニューヨークへ渡る。こうした「西洋」は、真実味よりも物語を盛り上げるロマンチックなスパイスとして使用されているのである。

外国を舞台にした作品は、「ローティーンの女の子にヨーロッパの魅力を実際以上に教えた」ことも指摘されており<sup>10</sup>、それについて竹宮は「マンガっていうものはそういうものです。そもそも周りの流れ、社会の動きをくみ上

<sup>7</sup> 竹宮恵子『少年の名はジルベール』小学館、2016年、p.120

<sup>8</sup> 同書 p.120

<sup>9</sup> 石田美紀『密やかな教育』洛北出版、2008年、p.284

<sup>10</sup> 同書 p.284

げるものですね。気運そのものを織り込んでいくのがマンガなので」と答えている。そもそも少女たちの外国に対する関心の高さがあり、それを少女マンガが取り入れていったと考えられる。さらに竹宮をはじめとする「24年組」と呼ばれる作家たちは、意識的に国の歴史や特徴を踏まえて描くようになり、「外国を描く」ことが、漠然とした、例えば「金持ち」「モード」といえばフランス、という単純な「イメージとしての西洋」から変化したといえる。国の特徴や文化背景まで含めたリアルな「外国」が作品に登場し、設定として重要な意味を持つようになっていく。そのなかでいわゆる「24年組」の中心人物となる竹宮恵子、萩尾望都を掲載した『少女コミック』の果たした役割は大きいといえるだろう。

### 3、『週刊少女コミック』における多様な作家陣

#### 3-1、細川知栄子と上原きみこ

ここからは『週刊少女コミック』を構成する多様な作家陣に注目して、引き続き雑誌としての特徴について考えていく。まず取り上げるのは、細川知栄子と上原きみこである。

『週刊少女コミック』の創刊時には、編集部が細川知栄子に執筆を懇願したというエピソードが知られている。後に『週刊少女コミック』の看板作家のひとりとなった竹宮恵子は、当時について以下のように語る。「「まず細川知栄子を取れ」と言われたのだそうだ。Yさんによると「細川知栄子を引っ張ってこれなかったら、ほかの雑誌に対抗するのは無理。場合によっては、つぶれるかも」とまで言われ、少女マンガに関しては新興勢力の小学館は、拝み倒して細川さんを招いたらしい」<sup>11</sup>。細川は当時、『週刊少女フレンド』にて「あこがれ」などを連載する人気作家であった。細川は1969年4月号に「春さくアドニス」(文・立原えりか、え・細川知栄子)と題された8ページのカラー作品を掲載したほか、1969年8月22日号から月2回刊行へトリニューアルされるタイミングで「愛の泉」の新連載をスタートさせている。その後も、「アテンションブリーズ」や「黒い微笑」など、『週刊少女コミック』でも読者の支持を得た。

こうした細川の活躍の後を追うように、『少女コミック』への投稿から登場し、看板作家へと成長を遂げたのが上原きみこである。上原は1969年6月号の「愛馬エンゼル」(原作・藤川桂介)にて、お嬢様育ちのルネと牧場で馬を育てるポールとの出会いを描いている。

上原は『少女コミック』に投稿した「恋のしずく」がきっかけとなり、本誌に専属で描くようになった。後年のインタビューでは、「特に「愛馬エンゼル」はこのあと続刊の「はばたけエンゼル」などにつながる作品で、青春の生き方を追い求めた、わたしの作品の基礎といえると思います」と答えている。上原は『ちやお』の創刊号や学年誌でも幅広く活躍し、小学館の少女マンガを代表する作家のひとりとなった。

上原の描く「外国」は、アメリカを舞台として愛馬エンゼルやハッピーなどの馬たちが描かれる「愛馬エンゼル」や「ルネの青春」などに加え、東西二つの国に分かれた架空の国「ライン国」を描いた「天使のセレナーデ」などがある。「炎のロマンス」においても架空の国「南の島コーラル王国」を描くなど、その舞台設定に特徴がある。

『週刊少女コミック』には、『小学6年生』の懸賞の当選者発表ページが設けられており、小学館の学年誌からのつながりが意識されている。投稿欄の年齢をみても小学校5、6年生から中高生までの読者が多く、最も主要な読者ターゲットは中学生と考えられる。上原は小学生を含めた比較的年齢の低い読者からも支持される作家として人気連載を継続して生み出しており、『週刊少女コミック』において重要な役割を果たしている。

#### 3-2、充実したスポーツマンガ作品群

また、この時期の『週刊少女コミック』について考えるうえで欠かせないのが、スポーツマンガの作品群が充実していることである。スポーツマンガを継続的に描いてきた灘しげみは、1969年には全米水泳選手権大会を目指す「青春のしぶき」、次いでバレーボールマンガ「勝利にアタック!」を連載しており、水泳、バレーボール、テニスなど、多様なスポーツを描いている。一方で、とくに1960年代後半には、それ以前にスポーツマンガを描いてこなかった作家にもスポーツマンガ作品を描かせており、それほどにスポーツマンガ作品が流行していたものと考えられる。

<sup>11</sup> 竹宮『少年の名はジルベール』p.128

例えば、1969年4月号の「スポーツまんが大特集」は、巻頭からスポーツマンガが3作品で合計112ページを占める大特集となっている。3作品で1ページの扉絵があり、ハードル選手を描く「スパイクは知っている」（まんが・松本美保子、原作・福本和也）が34ページ、女子ソフトボール部を描く「逆転ホームー」（まんが・百田てるよ、原作・佐藤有文）が47ページ、テニスに打ち込む中学生を描く「白球は空に」（まんが・丸田信子、原作・牧村章太郎）が31ページと続く。「スパイクは知っている」は、ハードル選手として日本一になればと父親に厳しく育てられる由美が主人公で、「スポーツまんの女王 松本美保子先生の熱のこもった力作です」と書かれている。松尾は『なかよし』にて連載された「ガラスのバレエシューズ」などのバレエマンガで知られる作家だが、『週刊少女コミック』では複数のスポーツマンガ作品を描いている。

さらに、1969年7月号ではスポーツマンガが冒頭から4作品続き、その他にも1本掲載されているため11作品中5作品がスポーツ関連作品となり、171ページを占める。1960年代後半のこの時期は「スポーツ根性もの」が流行し、『週刊マーガレット』や『週刊少女フレンド』にもスポーツマンガは複数描かれているが、これほど多くのページがスポーツマンガ作品で埋め尽くされたのは『週刊少女コミック』のみである。

1969年7月号の「青春のしぶき」（灘しげみ）では、「強いからだ強い心を！」「水泳に情熱をかける少女マリーの感動まんが」と書かれており、マリーのモノログでは、「わたしが泳ぐのは…どんな苦しみにも負けない強いからだを心をつくるためなのですから…」と語られる。こうしたスポーツマンガ作品では、自分の心と向き合い、「強い心」を持つことの意義が強調された。その他、1970年代後半には、ひだのぶこによる「氷上の恋人たち」や「銀色のフラッシュ」などのフィギュアスケートを描いた作品もヒットしている。こうしたスポーツマンガ作品が充実していたことが、少女マンガとしては異質にも思える1977年の「泣き虫甲子園」（あだち充）が『週刊少女コミック』に掲載される背景になっていると考えられる。

### 3-3、「少女マンガ革命」の実験場

この時期の『週刊少女コミック』を語るうえで外せないのは、先述した竹宮の言葉のなかで「Yさん」として登場した山本順也氏である。山本は、竹宮の著書やインタビューでたびたび言及される『週刊少女コミック』編集者で、後に編集長を務めた人物である。山本は、竹宮や萩尾、大島らを「娘たち」と呼び、戦後の第一次ベビーブーム世代の作家たち、とくに竹宮や萩尾が中心となった「大泉サロン」のメンバーなどの若手作家を広く育てたことで知られる。竹宮や萩尾、大島らの代表作となる作品が数多く掲載された『週刊少女コミック』と『別冊少女コミック』は、ともに若手作家らによる「少女マンガ革命」の主戦場となった。

とくに竹宮は、1974年から1976年まで「ファラオの墓」<sup>12</sup>、1976年から1979年まで「風と木の詩」と、竹宮にとっての代表作として作家人生のターニングポイントとなった重要な作品を継続して『週刊少女コミック』にて連載している。とくに「風と木の詩」はヨーロッパ志向や純文学的な作風が凝縮した作品で、ラブコメやスポーツものなどが並ぶ当時の誌面においても他の作品とは一線を画する孤高の存在となっている。ヨーロッパ旅行を経て、現地の街並みや自然、扉やドアノブの形にまで徹底してこだわり、ヨーロッパの文化を描き出そうとする姿勢は、どこの国かわからないおとぎ話のような「西洋」を描く作品と比較すると、描かれるテーマや物語も大きく異なる。美しい少年たちを主人公に、裸体が多く描かれ、愛と性、人の悪意や暴力、絶望など、それ以前の作品には見られなかったシリアスな物語が展開される。こうした作品がマンガマニア向けの雑誌ではなく、一般の中学生が主要な読者となる『週刊少女コミック』に掲載されたことの意義は大きい。まさにそれが、竹宮らが目指した「少女マンガ革命」であったと考えられる。

少女マンガ雑誌として後発となる『週刊少女コミック』には、従来の「少女マンガ」の枠組みを越えていくような新たな試みが容認される環境があった。また、この時期の『週刊少女コミック』では、根強い人気を誇る細川知栄子や低年齢層にも支持される上原さきこの存在があり、一方で充実したスポーツマンガの作品群がもうひとつの柱となっていた。今回の調査からは、こうした『週刊少女コミック』を支える多様な作家陣と「少女マンガ」の枠を越えていくような挑戦が許される環境が、「少女マンガ革命」の背景となっていたことが明らかになった。

<sup>12</sup> 同じ古代エジプトを舞台にした作品として、1976年10月より秋田書店『プリンセス』にて細川知栄子あんど美～みんによる「王家の紋章」がスタートしているが、「ファラオの墓」のほうが先に描かれている。

## おわりに

前回の調査(増田・猪俣2017)において、『週刊少女フレンド』の特徴として、「1960年代から1970年代にかけてのこの時期は、少年誌でも活躍する男性作家、戦前生まれの女性作家、ベビーブーム世代の女性作家、その下のおとめチック世代にあたる女性作家たちと、幅広い世代の作家たちが一つの雑誌のなかで同時に活躍するという状況がみられた」ことを指摘した。『週刊少女フレンド』においては、「愛」とは何かをシリアスに問う第一次ベビーブーム世代の里中満智子や庄司陽子、新たな世代の吉田まゆみ、戦前生まれのわたなべまさこ、怪奇ロマンの杉本啓子、ギャグマンガのおかのきんやなど、多種多様な作品がみられた。

今回の調査において『週刊少女コミック』に登場した作家陣について考えると、細川や上原による「少女マンガ」の王道ともいえる作品群、灘しげみに代表されるスポーツマンガの作品群、竹宮、萩尾、大島などの第一次ベビーブーム世代による革新的な作品群を主要な柱としながら、「おっきくな〜れ!」などの型破りなコメディを手がけた牧野和子、「つらいぜ!ボクちゃん」などシンプルな線とさわやかなキャラクターで人気を集めた高橋亮子のほか、「クイーンフェニックス」の横山光輝、「ダリウスの風」の作画グループ、「泣き虫甲子園」のあだち充など、より幅広い作家たちが並ぶ。『週刊少女フレンド』の場合は「少女マンガ」の枠の中での多様性であったが、『週刊少女コミック』の場合はより振りが大きく、「少女マンガ」としては異質であり、「少女マンガ」の枠を越えるような作品がたびたび登場する点に特徴がみられた。

また西洋の表象について、読み切り作品のみで創刊した『少女コミック』は、当初、短いページ数のなかで「どこかわからない西洋」が多く描かれた。しかし、1973年頃から、国のイメージを明確に持った舞台設定となり、文化背景まで描きこむような作品が登場し、1975年には「どこかわからない西洋」が描かれなくなっていく。ここには西洋の国をそれぞれ明確に意識して描いた萩尾望都や竹宮恵子といった作家の影響がみてとれた。改めて彼女らの革新性が浮かび上がるとともに、後発雑誌であるからこそその『少女コミック』の新たな試みが、少女マンガの枠を大きく広げていったことがわかる。今回可能になった3誌の比較からは、それぞれの雑誌の特徴をより鮮明に明らかにすることができた。

\*本研究は、科学研究費補助金(課題番号17K02396、研究代表者・増田のぞみ、共同研究者・猪俣紀子)の助成を受けたものである。

## &lt;引用・参考文献&gt;

石田美紀、『密やかな教育』、洛北出版、2008年。

竹宮恵子、『少年の名はジルバール』、小学館、2016年。

竹宮恵子ほか、『竹宮恵子カレイドスコープ』、新潮社、2016年。

萩尾望都、『私の少女マンガ講義』、新潮社、2018年。

増田のぞみ・猪俣紀子、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ——1960～1970年代の『週刊マーガレット』分析より」

『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』、第52号、2016年3月。

増田のぞみ・猪俣紀子、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ——1960～1970年代の『週刊少女フレンド』分析より」

『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』、第53号、2017年3月。

米沢嘉博、『戦後少女マンガ史』、筑摩書房、1980 = 2007年。

わたなべまさこ、『総特集 わたなべまさこ——90歳、今なお愛を描く』、河出書房新社、2018年。